
じゃがいもコロッケ

卯月海人

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

じゃがいもコロッケ

【Nコード】

N3516C

【作者名】

卯月海人

【あらすじ】

なんの変哲もないお惣菜屋のコロッケ。それを見つめる一人の中年男の姿があった。

(前書き)

五分企画に出すつもりだったのですが締め切りに間に合わなかった
うえに文字数が制限内に収まらなかったので普通の作品として投稿
します。とほほ。

じゃがいもコロッケ

会社帰り、渡部は今日も足を止めた。

ここ数日同じ場所で何度も立ち止まっっている。

通りかかるたびにどうしても気になってしまうのだ。

それは駅前通りのアーケードの中。なんの変哲もない小さな惣菜屋。色褪せた看板がどこか懐かしい、庶民感漂う惣菜屋のことうである。

トレイに所狭しと並べられたおかずのひとつにコロッケがあった。キツネ色の衣に小判型の、どこにでもありそうなコロッケが、なんと食欲をそそる揚げたての香りを放っていた。

売り子のお婆さんが客の匂いに気づき、黄色い歯を見せて笑顔を作った。

「いらっしやいよ」

渡部はどうしようかしばらく迷った。もう十分確認したはずなのに、やはり気にかかる。

結局、今日も探究心が勝ったようだ。しかめっ面をコロッケから離して注文した。

「じゃがいもコロッケをひとつ」

「はいよ」

人情味豊かなからつとした喋りのお婆さんは、トングでコロッケを一つ掴んで紙に包んだ。それをさらにビニール袋に入れようとしたりとところで渡部が遮るように言った。

「あ、すぐ食べるからそのままでもいいよ」

商品ケース越しに手渡され、あつあつのコロッケを受け取る。早速ひとくちがぶりと行く。口の中に香ばしい衣の味が広がった。イモとひき肉、玉ねぎが作る味の調和はほのかに甘みがあり、これぞまさにコロッケという素朴な味わいを醸し出していた。

しばし衣の食感を楽しみ、舌で転がすようにイモの味を噛みしめる。

うむ、美味い。

美味いは美味しいのだが……。

首を捻ってひとりごちる。

うーん、やっぱり普通のコロッケだな。

結局、渡部の三度目の感想も同じものだった。

そのコロッケがふと目に止まったのは、二週間ほど前のことである。

『じゃがいもコロッケ 1個 80円』

黄色い紙に赤いマジックで書かれた商品札がガラスケースに貼られていた。

惣菜をあまり利用することがなかったので、通勤路として毎日通る道にありながらそれまで気付かなかった。

じゃがいもコロッケ？ 普通コロッケはじゃがいもだろう？

ふとした違和感に思わず立ち止まった。

コロッケといえば、主素材がじゃがいもなのは、日本全国共通の認識のはずだ。

その証拠に、かぼちゃで作ったものは「かぼちゃコロッケ」、菜の花が入っていれば「菜の花コロッケ」、じゃがいも以外の素材はそれを強調するために商品名に記される。じゃがいものコロッケは「コロッケ」のみで表示され、じゃがいもは暗に省略されているのが普通だ。

なのにわざわざ「じゃがいも」を強調するという事は、これは一風変わった作り方のコロッケなのではないか？

一度気になると確認せずにはいられない。渡部は早速そのコロッケ

ケを買って食べた。

その感想は先ほど述べたとおり、どこにでもあるような普通のコロッケだったというわけだ。

渡部は難しい顔をして、歯形のついたコロッケを睨みつけた。

道行く人の中にはそんな中年男を訝しげにちらちら見る者もいた。食べかけのコロッケを睨む男のしかめっ面と、それを見守る売り子のお婆さんのここに顔が対照的で、それは確かに奇妙な構図に見えた。

俺は細かいことを気にしすぎるんだろっな。

三度目の味を噛み下しながら渡部は自嘲した。

人が軽く流すような小さなことでも自分には大きな疑問となる。目につくと頭から離れず、とことん追求してみたいくなる。ことを大袈裟に考えすぎなのだろう、自分は。

この『じゃがいもコロッケ』も大した問題ではないのだ。その証拠に通りを行く人の誰も気にとめてないではないか。店の人の認識がちよっと違ってただけで、特に意味はないことなのだと、とつくにそう結論を出したはずなのに。

なのにやっぱり気になって、こうして三たび口に行っているとはなんたることか。こんなどうでもいいことを、やっぱりなにか特別な素材が入ってるのではなからうか、作り方に秘密があるのではなからうか、そんな風に勘ぐって、一人で謎を深めようとするとは、どこまで自分はこだわり屋なのだ。

最後のひとくちまで食べつくし、渡部はもう一度『じゃがいもコロッケ』の札を見た。

まったく。こんなことを気にするのは自分くらいのもんだろうな。

肩をすくめてひとりごちる渡部の顔は、しかし知らずと頬が緩んでいた。

視線に気付き、顔を上げると売り子のお婆さんと目が合った。気恥ずかしさに笑おうとして、失敗したようなひきつり顔を作ってしまった。変な客だと思われたらどうか。

「お婆さん、なんでこれは、じゃがいもコロッケってつけてるんですか？」

気まずい空気のごまかし半分、興味半分でとうとう疑問を口にした。どうせ意味はないと言われるだろうと、さして答えに期待してはいなかったが。

するとお婆さんは口の端を上げ、意味深に渡部の目を覗き込んだ。ここに顔からにんまり顔への変貌に、渡部は僅かにたじろいだ。

「こう書くと、気になって買ってく人が結構いるんだよ」

なんだって？

その瞬間、渡部は固まった。

あんぐりと口を開け、思考が流れ出すまでのしばしの間石像と化した。

厨房の揚げ物の音が、白けた空間を跨いで散っていく。

学校帰りの学生達が、乾いた笑い声をたてながら、渡部の後ろを通り過ぎていく。

なんだ、そうだったのか。

肩と首が力なく垂れ下がった。

してやられたという敗北感を感じないわけではないのだが。

思考が止まるほどにショックを受けたのは、それとは別のことだった。

何かがすんと抜け落ちた。頭を小突かれたような気分になった。

なんだ。こんなことを気にする人間は、自分以外にも結構いるのか。

なんだか莫迦莫迦しくなった。お婆さんは黄色い歯を見せ、したり顔で渡部を見やる。

その顔を見てると、急に可笑しくなってきた、渡部は苦笑を浮かべて言った。

「じゃがいもコロッケ、もうひとつ貰うよ」

まいどあり、とさらに笑みを深くして、お婆さんがコロッケを袋に詰める。

その商売根性に感服だ。

なんだか全てを見透かされてるようで、負けを認めるのは少々癪だけだ。

(後書き)

このジャンルが文学でいいのかどうか微妙ですね。

もっと削れる部分あったから二千五百文字以内にできただろうに時間切れとは情けなやです・・・。

一応文字数内に収めることにしました。中盤の段落ひとつ丸ごとカットしました。

カット前に読んでくださった方すみません。m | | m

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516c/>

じゃがいもコロッケ

2009年3月24日10時05分発行